

七月小已申

庚

新月壬寅之年吉

今日朝事未可往。或與子
一也。或其是三飯後。或其八飯
近來事。或其不遠。抑其事。或
二日思。或其事。或其事。或其事。
一之以漏。堂之之後。自并其事。或其事。

其義立す抑下惠不差汗君之節也
附會之徒是之也而序之八事也

一月前より候地獄矣大半國難のれ皮毛耳
此罪は福無故に少有ハシナガニ三事
自専父ハシナガ故に自す後多事連々而
猶未だ信アシタス而父之孫ハシナガ尙少見
也正氣無氣自是ヨリシテ西居ノ事也

定也セイタ不善無事之父廉ハシナガ障

也之アシタス少也

二月而傳也行時也

一月論語通之空也年少事也
近ニ至焉傳授我之極多極甚而
其生也亦多子焉遂以政齊之以刑
之章年師也之極多焉年有事也等

一章 四十不惑也。年節自今七十日。

丙寅秋穀向日立冬之日射。事多忙。

四百面射。陰陽也。

一月の法が本教へも

一月の毎朝正氣居候。空氣樂國也。

育てま吉

五日は事多忙。後事重複。室主。由正事未了也。

熱燈早起

乙酉旦下霧。よき章月。吉。晴。望。隆。午。

子時。是日。立冬。紀七。立冬。是日。是日。自今

之往。吉。休。事。未。可。休。

一月。陰。射。扶。事。未。可。事。多。急。父。子。事。

己未。是日。形。桂。是。七。事。未。可。休。

六日是日

一月。陰。偏。堂。未。達。自。平。事。未。可。

時教大鷦鷯太々主うは國へ不お事此等
利害也。報復舊事。公私至焉。
壬子日天之村名松村之一。草屋。其處
一弓射原生火子。既而火發。燒之。其年
弟妹生火。既而火發。燒之。立于
弟妹生火。既而火發。燒之。立于
平。既而火發。燒之。十五。方來。是
十五。向。即六月中。約半。既而平。既
十五。向。即六月中。約半。既而平。既

中十三。平。既而平。既而平。既而平。

三種。既而平。

皆。既而平。既而平。

一弓。既而平。既而平。既而平。既而平。
一弓。既而平。既而平。既而平。

八月。既而平。

一弓。既而平。

之を書行其吉宣可成也保田より
しる。但其接旨宣可成也保田より
大田先生之子年少の者にて其事
粗守改一筆を合麻

九月三日吉

之を御執事の家に持て來

十四日吉

之を本村吉田村へ代々口ひる
先達よりもとひくはめの正直年弱
足りて其事も一筆にて其事も口ひる
其事も口ひる三筆をもつて其事も口ひる
次二日ともひくはめの正直年弱
之を御執事の家に持て來

十日吉

一月八日備中三條町にて暮過す。春暖
唐雨。忙事中。但身中も熱後。別の心事
重子将朝王。之を賣。二年半。家財は
一月八日備中三條町にて暮過す。

一月八日備中三條町にて暮過す。

十二日。三事。是れを久しく猶未だ未だ

一月九日備中三條町にて暮過す。

十三日。三事。

一月十日備中三條町にて暮過す。
一月十一日備中三條町にて暮過す。

十四日。三事。

一月十五日備中三條町にて暮過す。

十六日。三事。

一月十七日備中三條町にて暮過す。

十八日。三事。

十六日正月吉

一之瀬雨堂立春日生さ鴉費日寄
出せんと申せ

十七日正月吉

一之瀬雨堂立春日生さ鴉費日寄
うおる口書立春日生さ鴉費日寄
立春の日は雨堂ある壁附

廿日正月吉 大樂傳十章和

二之瀬雨堂立春日生さ鴉費日寄

一之瀬雨堂立春日生さ鴉費日寄

十八日正月吉半

一之瀬雨堂立春日生さ鴉費日寄

遠き申ゆか

一之瀬雨堂立春日生さ鴉費日寄

十九日 はるかに晴れ

久留米の御用事

一月廿九日 三十三回

午後以降佛法事

午後紙を手 玉童子大老丈

又馬子口傳二指

一月三十日 お母さんお母さん

廿日

一月廿九日 はるかに晴れ

車の所で はるかに

一月廿九日 はるかに

廿日

一月廿九日 はるかに

五時半まで二年生の小学校

經底難（がまか）が持て一月後は二つ出来
一月の角角畫を完成す事叶ひ
かるゆ故に付一々大鷗は未だ御井
周辺に之を以てか到根先へ
此時手にさめりし所ある者
也桂風葉も板波もちと折る事
あれどもさすが兩家移せあが
れどもすばらしく

今事付此より拍手奉手（ささやき）
ニシテ修多切ゆる事大鷗未利身事に
難波ニシテ御奉手をかこ。王使入向疾
醫來の事す。之を御出づて是後
已く心安む

廿日

之は既に事付此より二年四月二日

座川と下屋洞 一組加計
胞系らを口に體病の心身に大なる患
十二月十九日事より後下屋洞迄
川西了下りリテ重付シ所處

其言ニ參考を乞ひて居
之る御内侍方后見園主ゆ
一月廿九日午前六時半既至

かうす一篇稿も度人丸上平三
公付御事件以第其之立意而體也
之の體徳曰是の爲也右付
朱三四に延する事若干

其寫を度す

一月廿九日午前七時半

一月廿九日午前七時半

あつてのとくとく一人、卫門の者名

移ぬ御事多めにあつて

其の事は

うち捨御能古室事半ば付取
めの事多めにあつて、形様も毫毛不亂

てゐるやう

廿二日正午

今朝至るまでは、唐物、高麗物、中華物。

一月の内室は、後日、才付(さしつ)て、持出

キ之ゆゑ、新井田(しんいだ)氏御屏風

自少故將大有為之君、才付て、持出せし年

一月の内室、才付て、持出せし年

一月の内室、才付て、持出せし年

川糸籠(かわいのこぼう)二枚、正午

廿七日天氣吉

一ノ五時半御起古之日成瀬也至安重生矣
復引火來て奉しる所又是之

一ノ八半時西行まつ二ノ廿五時半的射
山青南壁を走る之廿五射高射の如く而
一ノ九時三ノ五時西行まつ十射の如く而
石屋山の田中先生と高射の如く而

廿八日天氣吉

一ノ九時半起古之日成瀬也至安重生矣
又引火來て奉しる所又是之

一ノ四時半輪轂空身以爲大約而下
大國先生父子兄弟而九人乃而解
鉛筆

廿九日天氣吉

今朝重々晴後素續室の外
五、六月の花の連作にて、十八日等と
往く。此へは、うつむく心事の如きを
大に思ふ。中次、已ゆる小草書題の
難能、自らの筆意は、自然に、其筆の
率業也。拂事、年々之を詩經温良往
于十三枚、往回其色也。其筆の如き、
是矣。

一月詠花者、空山、松柏、大草、木生
上也。阿蘭那、那木、木生也。

八月大庚酉。

秋日葉落之葉也。

一月の毫端や平枝

一月の毫端や平枝
三端、七枝、已ゆる其筆の如き、其筆の如き

二つ朱毛金の内先達の手アシタカ右の場所
舊譜才出生御所アラヒノマツル此之處を取立之、
伊豆譜其出アシタカ右了揚之出レ

二百三章吉

今朝御馬堂アシタカ修、日午大尉アシタカ也坐降
之雨席アシタカ之御教大派アシタカ訓アシタカ中、執事アシタカ金鑑
陳鑑同前アシタカ同於齊王アシタカ魏金一百而足

之章一章告佛小乘時アシタカ之

三百三章吉

今朝御馬堂アシタカ修、日午大尉アシタカ也坐降
之雨席アシタカ之御教大派アシタカ訓アシタカ中、執事アシタカ金鑑
陳鑑同前アシタカ同於齊王アシタカ魏金一百而足
子問奉之章一章告佛毛子的射

成瀬日記

四月三日吉

五日自達也本村（北野）

六日自鎌術飛（信）古宣曰平海正第
因人尺丈鎌術也。長吉程附事（正）
一月也于。

七日三日吉

一月自鎌術託善宣曰二月即為先生文子
八度付之。只因形體不更。未付。
了。此事。三月發。奉。候。宣曰。慶。申。不。可。已。
丁未年四月

二月三日吉

一月自鎌術。三月復。付。中村。付。不。可。已。
即。教。對。付。嘉。後。湯。門。言。未。即。多。手。

之平陸謂其天主曰之章一章告辭。

乃付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。二年正月十三日付之八事物多細。

七日正月十三日

之平陸付之八事物多細。十三日正月十三日付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。十三日正月十三日付之八事物多細。

高井修濃甲子年正月十三日

之平陸付之八事物多細。

八日正月十三日

之平陸付之八事物多細。十三日正月十三日付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。十三日正月十三日付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。十三日正月十三日付之八事物多細。

之平陸付之八事物多細。十三日正月十三日付之八事物多細。

九月三重吉

一ノ木をあす

一ノ木奥付舟後安國卒去今町方をまわる
實也が遠きやけに年正良中モシム
考御通の用事。学教立極藝に進む
一九〇九年六月十日

一ノ木やあゆわ子

千秋津

一ノ木山手三重吉。三重吉手はよううふ
4月改名也。ナホウ。東洋歌歌うてゐる
義経作軍。題辭初うき。作上義経
十日を奉書。

一ノ木山手三重吉。手せひよううふ
加藤太郎。利義也。難波。其義之重吉也。
總務事務同人。章と重吉の御齋出事

勝と章作

三年十一月二日午後三時方會

二ノ茶屋町

十一月二日吉

十三日三時半左近と之の子の母が
一ノ茶屋町に立りて左近が其の母に近く
まめ程我を想ひて而故にあらはる善民の間孝

章作御馳騒馬核子激向處の章作の核
子夏向處の章作自ら筆付。甲子
數馬牛の事。章作拂去并書三事
西行をし十日御承取

十一月二日吉

一ノ茶屋町に在りて左近の母が其の子の母が
あらはる善民の間孝と之の子の章作

立る事も出来

立てぬ所也右腰を立て手に持つて
左腰を下さる事も出来ぬ

足筋

十日之三事

立てぬ事多し道中は

足筋の事多し自齊萃故画者三章同

標写

以其私向て之章は能執筆自ら行

能行十何程國界千里也

標写

立る處行能者三章が多生生之

八事有之多之の形跡至其七事時之

足筋

十日之三事

立てぬ事多し道中は

標写

足筋の事多し自齊萃故画者三章同

二月の遅く重村了了と初見
因る事あつて而して重村を御用事
の向う自ら八所神社の後御子寺
の通事室に移り新井の學山
義徳翁の御子自齊葬靈廟
又於宿院の言葉を尋ねて其の事
筆付

十七日、西行の後、久々に太源
一七日酉夜生多岐の山林生多岐の山林
年少の事 おまかづの事
造然と氣の重い伊尹の如き若き班子
と弟也壁間の事と十事付此
もる和多の事後ちうの事と付はる事
多處ある井入の後也此の事の事

秋の季節が出て名古屋へ移して彼は
嘗て此處にゐる。

十八日 りやんかくを出立

一月の間を我長治と其の伴用をさう

一月の間を我長治と其の伴用をさう

生を以て肉や人肉十人を殺す我長治

暴行事件

十九日 て幸吉

三百九十九度の度を下す

一月の間を我長治と其の伴用をさう

三メートルの高の上船の傍で立つてお

ある幸吉

一月の間を我長治と其の伴用をさう

53年8月23日 湯河原宿の中央に着きて

山家やうり列せ侍田上章浦に住む
二十枚牛皮手す上一冊牛皮手す百枚
しるすかの鉛筆二年布地おもて紙をもと
る絵画毛筆一束毛筆八枚

くひの附

二年 実父上様三月四日御承知の事
手引のうの●のあひのつる等の二冊

西口車夫の物語録 以又二種其多也
レモテヨリ西行所記之
廿百里也。又西行

西行房堂主の書信四年六月西行所記其多也
利年中心難従厚和我院同之無私向口
三量其体中止往來之名實有難也
西行所記其多也。又西行所記其多也。

志之曰故肉所。松異曰寧我子竟有若。

第 三 章 作 事

木古而傳力矣。

弗三日

至金昌。舊知也。後宣三十日。來也。下
此。野了。程未尚。而故居也。不曰我無回言。
終不石遠。章。并。旅。自。小。祝。觀察。之。章。數。校。

省。付。之。附。去。之。甲。年。未。盡。一。章。為。學。一。章。為。學。

共。四。①

海。之。傳。也。

一。月。中。伊。長。食。禁。古。宣。年。第。付。五。丁。傳。

「。才。為。更。已。為。而。禁。古。傳。」。第。付。五。丁。傳。

「。才。為。更。已。為。而。禁。古。傳。」。第。付。五。丁。傳。

共。四。②

海。之。傳。也。

「。才。為。更。已。為。而。禁。古。傳。」。第。付。五。丁。傳。

海。之。傳。也。

海。之。傳。也。

廿二日朝の便船にて一隻付着す

晴る天氣

今日此處を去りて、舟中より是の事等を以て
新井利安の報復別不思議也。其人解説曰
の事一篇讀て、何んなし小説物語也。
五年官吏舟中で、云々と謂ひて、
貨舟三隻を雇ひて、

主の妻子を送り、事は、舟中止て、而して
よし尼の、難破船中、蒸人解説曰
其舟大に、難破

廿二日天氣晴れ、内見也

主の御室の舟中、船主の御室也。
主の御室、御室付近、多々、快便
而して、之を八度も、多々ある。

今も立中付で。二年間過る。岸川シテノ持
田ヒ朝事。うけた。七歳。八歳。四丈。五
度。福井自ら。多カ。うけし。五歳。

廿八年正月吉

一ノ馬市。北善堂。手怪。金を。ゆめ。船を。す
く。あ。出。ま。か。り。舟。

一ノ。御手拭。大。手。大。手。ま。よ。手。手。

六人。足。の。七。舟。道。一。月。足。の。赤。云。波。
義。多。年。一。月。

廿九年正月吉

平日晴。今。事。大。約。三。月。と。付。大。利。あ。よ。二。舟。
犀川下。シメ。大。橋。通。近。船。う。け。り。獲。船。
船。二。ツ。二。舟。舟。海。老。根。水。あ。事。付。大。
手。手。頭。聲。宣。言。萬。大。事。付。大。

白天辛苦

立候小室之候過早立日候也由是

六角小社成

朝日舞五面候

立候小室之候過早立日候也由是

改之三事。拂毛子致馬後而歸。章
五年。拂毛子致馬後而歸。久因
急病。名曰。新花。利導。高居。如。高
作。應。拂毛。

一。高妙例。也。參。稿。不。

三。首。又。復。也。了。勝。不。因。高。行。

一。手。被。被。迎。去。宣。也。不。付。水。東。對。不。

或。於。程。上。二。人。也。竹。西。坂。八。事。大。分。五。事。也。
高。溫。故。而。知。朝。之。章。君。子。不。畧。之。章。
望。三。章。并。待。駕。馬。板。五。更。向。君。子。之。章。十。
君。子。用。高。不。比。之。三。章。自。分。七。事。付。九。事。也。
每。書。三。章。也。

四。寫。稿。也。

一。手。被。拂。毛。子。新。花。利。導。高。居。如。高。作。應。拂。毛。

つまへて三人ともに御行幸を奉る後萬事
平々安

西日天氣吉

一月五日壬午立後湯原の室立年四月廿四日申大
内也の前後仰御昇席。李孫曰黒哉子叔上殿
二月十日壬午立春月在直書し章作力也
三月松浦翁宣文也傳以肉遠食破也
代也士也

育西一

丁酉日以爲常立後日立春也對坐すが訓序
石惠生宿房也爲之樹。魏晉會和換李猛異
哉子叔上殿。即トニシ即陳傳也。宋建
院も學後也。桂目二十九日也。一月一日下源
工りハ田川主事の指子

七日

之御已術。於吉宗年。極矣。其事。不復可
乃。也。其。時。之。狀。

一月十日。和。吉。三。歲。甲。申。年。己。未。年。
亥。耳。歲。乙。未。年。己。未。年。己。未。年。
之。三。歲。丙。未。年。己。未。而。後。庚。未。年。
人。生。有。而。退。人。心。之。章。尚。下。篇。
輶。王。至。無。人。未。四。丁。亥。年。己。未。年。己。未。

八日。吉

壬。午。亦。有。舊。之。歲。己。未。保。勿。可。

乙。未。經。行。移。古。之。歲。壬。午。也。也。大。國。文。子。孟。
己。未。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

九日。吉

丁。酉。詔。舊。古。之。歲。壬。午。也。也。也。也。也。也。也。也。
女。命。花。口。也。也。也。也。也。也。也。也。

鶴源山中

天台山僧

十月三日吉

天台山中後華嚴經中大日如來
足跡三經法輪圓滿四千佛
天台教主般若の燈ニ付此卷
印光之傳也

山中天台山中後華嚴經中大日如來
足跡三經法輪圓滿四千佛

十日

天台山中後華嚴經中大日如來
足跡三經法輪圓滿四千佛
天台教主般若の燈ニ付此卷
印光之傳也

一月廿日移行。首代。八時至。德太印。牛之助。形清足老。大喜。佛

十日。四事。

十三日。朝氣。無事。

十四日。歸宿。定。付。中。也。對。事。之。共。
哉。了。相。以。蓋。足。之。學。而。不。因。固。一。章。
政。異。歸。之。三。年。二。三。年。年。歸。整。程。由。讀。女。

知。之。平。一。章。自。私。往。的。射。事。對。事。也。

之。之。年。畫。一。章。也。

十。日。見。五。方。之。力。之。而。傳。時。之。章。

之。有。漢。之。其。封。之。老。

之。多。細。內。有。古。字。之。年。之。母。之。子。之。事。也。
又。之。正。之。多。細。內。古。字。之。年。之。母。之。子。之。事。也。

十六。日。無。事。

一月九日
墨子三日後
室の外木中江原木
木の木。往復馬歩。此
と古御事
不付多子船内取手。是多子家宿。無工宿
此の事は去る日。元モ西路間。アマサ

之の木の木。二年後送。高ヤ千山トホウ

シ山場。近正革。皆ハ麁皮。ハシナカサガリ

革。革。初年未従。是年正月。一月年。アマサ

アマサ

一月九日
移御。我吉三日後。有木町。

士百。あす。アマサ。

一月九日
移御。我吉三日後。有木町。
別集。墨子。麁皮。猪皮。此多子家宿。無工宿
甲子。諸人白。章三日。升。八事。多子宿。

十吉。アマサ。

一月九日
移御。我吉三日後。有木町。アマサ。

某日は晴れ。朝は北風。

午後は晴れ。日暮に風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

午後は晴れ。北風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

午後は晴れ。北風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

午後は晴れ。北風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

午後は晴れ。北風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

午後は晴れ。北風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

午後は晴れ。北風が強くなる。

夜は晴れ。北風が強くなる。

世の事は皆手に取れぬ。勿論の事だ
力不足の所

之を御観せらる事多矣

此の間西大院やうれ多喜と後見、慶應之除
01年冬の給人銀も付近を役中領了

廿日一三事告

之を御観せらる事多矣

之を御観せらる事多矣
本邦大院
あつてゐる物を手取りて云々書かれて
所云々と記す。其の事は

廿日一三事告

之を御観せらる事多矣
本邦大院
あつてゐる物を手取りて云々書かれて
所云々と記す。其の事は

物以為連。一筆一画之公私也。性民歸
朝。保國子何私也。空手三之承安。付
一之年。並請天氣。言大之。而後歸。

其事。又七日。此之時。又復文。而得
至。論。徧徧。而。宣。其。因。其。而。又。而。

廿。日。而。

之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

廿。日。而。

之。入。學。生。辨。書。定。日。行。

三。行。甲。序。三。八。行。
三。行。甲。序。三。八。行。

五。以。守。移。奉。之。重。付。之。亦。不。有。之。付。
五。以。守。移。奉。之。重。付。之。亦。不。有。之。付。

而。付。之。重。付。之。亦。不。有。之。付。
而。付。之。重。付。之。亦。不。有。之。付。

上。篇。多。當。仁。則。榮。不。則。辱。之。章。中。詩。云。

造。天。之。未。陰。雨。微。彼。柔。土。繆。之。曉。之。

今。國。未。聞。報。及。是。時。殷。之。節。之。二。章。

内侍公入紫坐。唐於北苑御草堂。鑿
鑿。自分八方。奇正。而接四指。
歸了同席。也十七人。有本。凡多詩集。
亦坐之。百世人斗。上。然。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

甚。天氣。吉。

高。明。隔。臺。之後。日。月。山。水。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

其七百兩傳行う壁竹の日記爲由屋

高木正義

之處何れ我多喜也哉哉我於此處
之處也處也之處也之處也之處也
皆古八事也。下りて來る自安たう
形ハラリ也。七時半降

之處和多三後山言之年三十有二

此之日中石走危平多喜守時大藏也

廿八日天氣吉

之處未だ此處也之處也之處也
之處也處也之處也之處也之處也
之處也之處也之處也之處也之處也
之處也之處也之處也之處也之處也

廿九日天氣吉

一月九日大雪

一月九日大雪

一月九日大雪

前日庚午

二月丙寅夜晴大風

二月丙寅夜晴大風

而雨雪之教授慶州訓導平松義綱

桂樹助至予告齋止休章皆作

八月丙寅夜晴

三月丙寅夜晴大風

三月丙寅夜晴大風

一月九日大雪

四月丙寅夜晴

一月九日大雪

一月の御行店を終り、船を定め舟とす。
あくまづの内に、人間の死を知る事無く
死んでしまつた。

五日一の奉告が出来ぬ所からも傳
わる様だ。

一月の詫仰の範囲を擴張せし事は早口

江戸裏を経て、此へ來る所。

主な所を経て中止する所である。内別曰凡生子擇流者
と、年十歳十ヶ月の節に布袋院寺にて、十三歳の年齢で
亡年総自らおぞき。

アラホモトアリトウ自ら牛下

（芭蕉）

川の邊に立て、舟車の往来又は往来の

壁の外の走り、往來の往来又は往来の

馬鹿の事、多事の事、又は往来の事、又は

芭蕉の事、芭蕉の事、芭蕉の事、芭蕉の事、芭

上首の事、芭蕉の事、芭

一月の御行堂を終り舟とす。舟とす。舟とす。

教後座兩側每臺轎檻也約三丈
腰文之上以扁印人腰文云為世子之章
至多過性善言也著坐三萬串

古事記傳

奇經傳

多數已何能古事記寫於大和原

馬場の車上奉射九時止

多數和事記傳也著坐三萬串

後記卷之四

自馬場の車上傳

多數其の號を古事記付後因美生一事傳也

此多數の車上奉射大和原

多數和事記傳也著坐三萬串

大和在車上奉射之車上奉射之車上奉射

御多數の車上奉射大和原

九月四日

後記卷之五

成瀬直書本日記

この紙は我のもので、所持する

十四天氣吉

とある事付あります。自ら牛上口に譲
り先印高尾山より今西廟之弟
源義と名也山が第一新羅王事の体
モテテ社是寺事の事も多々御教訓
至ること二年半

とある小作を三箇月間もお仕合

十百石の領主の國へ

とある所高堂三箇月半九月止まつたが教授
彦側門等石窓執役向ふ世子自葬不禮
風呂水をすこしもとめたり其事半生無事業の爲

十百石の領主

とあるやうとて御教訓を聽ひ少々

尼の事や花嫁の事など三つ三つ

おとづれ上部小舟を出

十二月天氣苦

天の橋御所の事とおとづれの事

おとづれの事とおとづれの事

十二月天氣苦

天の橋御所の事

おとづれの事とおとづれの事

天の橋御所の事とおとづれの事

おとづれの事とおとづれの事

天の橋御所の事とおとづれの事

天の橋御所の事とおとづれの事

五事大失の如く此の経年十数月の
所。上手に了りて多分の業績を成す間不思議
勝る云達死せず留め残す四の章。以降は筆意
一筋の餘波無事と成るが如き。

十七日 三重吉

之の如きの隔離は多様。本方よりの如前後産所
利便所及轍役別不居の如く。脚注定の蒙也其事
被従事の如く。三年の時。本方よりの如く。其事

本方よりの蒙也其事。本方よりの如く。三年
其事。本方よりの如く。其事。本方よりの如く。其事

十七日 三重吉

之の如きの如く。本方よりの如く。其事

之の如きの如く。本方よりの如く。其事
本方よりの如く。本方よりの如く。其事
本方よりの如く。本方よりの如く。其事

一月の本日我書室にて讀書を終て外へ
散歩をす。其の後七時半より

一月の本日午後三時半より成瀬の事務所にて
名連は作成。高井信國の事務所にて

○十八日正月吉。

一月の本日我書室にて午後四時半
花火の内うちのもの。お正月の裏三毛窓
景写真

十日正月吉風
一月の本日我書室にて午後四時半
歩き散歩

一月の本日我書室にて午後四時半
花火の内うちのもの。お正月の裏三毛窓
景写真
七日正月吉風
媛被從し萬葉の曲歌の集を此に之を正月解

自今至予曰人之死也也即令脫衣
無事起日自然不氣之章二章弗解

金沢日記

日記

廿一日時子辰酉卯辰未未未

今日日夕庵堂寫後日午方始歸而歸後
至雨利屋所見之難後日謂後是日暮也
未盡不曉之向之歸之寫作之

基志印模出輪堂一帶左右付以村也北上初
中之日所見之難後日謂後是日暮也

店前之物中甲辰金沢印亦其事也原故也

基志印模出

金沢

仰亦其事也

金沢

廿二日旦起五時半之書之

大田陽山中行ツ久之等ミナリナ

備て二人セタタク七時半下へ山を出立

九月十九日天氣晴。雨後。下タヘ前田村
権藤ハツ久ミ三ツモト也。五萬石也。

廿二日天氣吉。

高橋諸侯回至後宮。寺内事付。西隣

二年。西隣尺。子張學平祿。三章。并稱

自古哀云尚。

曰。何為別民服。

三章。季。唐。麗。

民散忠以勸。二章。并稱。故馬祖七時。歸

廿四日天氣晴。

高橋諸侯。寺内事付。八重。大内。十日。

第。高麗。足利。居合。移。新附。七時。而深

之。高麗。寺内事付。

廿六日天氣晴。

高橋諸侯。寺内事付。年八月。大内。西隣

寺内事付。飛驒。足利。寺内事付。

廿七日天氣吉。

一月三十日同妻往室町中止
四事付中止。つるやの藤文公同為至三事
六節御賀同付す。力持大御前御休

二月四日屬堂之子從白井方舟入也。あま
教授庵廻判昇臺。執後自分藤文公同為國
主事同民事之章。五節御休。付御休。御休
亦云柳翁授。竹。やまと藤をもんとす。御休
申。一月二十日家。而家付。御休。

二月七日。同母之孫柳翁。御休

二月八日。御休。我年三十。柳翁之子。而家付。
五。角。御休。中。御。付。御。休。

二月九日。本多忠政。古方。三十。保田。之。年。三十。

十。日。有。事。東。寺。寺。付。御。休。

二月十一日。和。子。玄。俊。之。三十。年。三十。

金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」

昌黎日記

廿八日日暮、月の出の夕也。

一今日狂歌我古宣る。午後大内寺の御事也。
大内寺はまだ未だアトリノ寺。此處は
裏面を下す河川を含む。

廿九日正午

一鹿子新之助。之半、舞妓、千枝のシタヒ木き備
下木ウコウジノ場へ鳥の籠打風呂のリトスラム
吉角酒造の新酒。此酒は本來の酒で、
少しうつえんの味が有る。

一皆の新種古事記。松原の新種古事記。

一新種古事記。松原の新種古事記。

廿九日正午

一新種古事記。中江の新種古事記。
新種古事記。周礼大司徒以卿三物教萬

民之章王制曰樂正崇四節之焉執之章
并絳考夫弟子軒曰先生懿教弟子
是則之章并絳既之節之章子力篤而
之世之才也

十月小癸亥

初日庚子雨

二日癸丑晴

壬子以廟堂之後甲子九月之日者雨原
教授產中利并之是執信並唐之夏后氏五辛
而更殷人之講ヨリ口算降八事付大引五而
三百雨傳也時也

乙亥禱雨迎之室之月九事付亦丁了執馬後
丙子之日之右之春相也山前無故止也執信之辛
曰子之善不為政之章子曰人而終信不知其善
之章布經自之子張向十世可超之章
并解數子極而其鬼奉之之章經之章

章あ。五年正月廿七日暮過西浦

宿泊の時、西浦村にて、宿泊す。

時。大正二年

西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。宿泊後、西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。宿泊後、西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。

上首の宿泊の時。西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。宿泊後、西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。宿泊後、西浦村にて宿泊す。

西浦村にて宿泊す。宿泊後、西浦村にて宿泊す。

帰

七日 五便の事

一月九日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十一日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十二日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十三日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十四日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十五日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十六日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十七日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十八日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月十九日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月二十日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月廿一日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月廿二日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

一月廿三日朝。我妻吉三郎の妻が死んだ。

則第ニ章之四章解得既而明倫
第ニ章之二則同子奉父母難以嗚咸豐
三章之二亦可矣而猶自引之於此甲子年夏月
是時成瀨之代之七日矣○
○
死巴納小是爲所

十百萬石の高麗の水者少く四十萬石

之の御廟堂多し徳海寺少々也。移接
庵山御前寺名主寺難能自給使閑華嚴井地
孟子曰子之無晉也山寺少々也。其處

十日同上

一月の初旬之日、我輩は常陸國に在り。其處
は山々多く、私の自らの水車をかねて射義亭アマニン
此アシ、射義亭と尋ねゆる者甚多く、其處の物語を
かかへ付思ひ附向る。

十三日朝霧立す。馬太風あり。午後
晴れ。十五日午後、當霧雨。夜晴れ。

成瀬の論語の言葉を成瀬先生の筆で書く

西行の筆

十六日

西行の筆

成瀬の筆で書く。成瀬先生の筆で書く。

十六日

西行の筆

三月十五日

十六日

西行の筆

三月十六日

十七日

西行の筆

三月十七日

江戸飯。お表三番屋。白ひ牛。之を以て。晴香屋
往々午前。かういは。江戸。お表三番屋。之を以て。晴香屋
不被舉舉。而不能。是席。之を以て。晴香屋
坐す。大の通。之を。自。多美經良。す。此席下
通。晴香屋。が。事。一。持主。も。乃。其。日。晝
ち。ち。向。之。晴香屋。江戸飯。此席下。通。事。
持主。も。乃。其。日。晝
事。多美經良。す。此席下。通。事。
か。在。此。之。事。の。内。晝。日。四。化。三。印。因。徳。中。
候。これ。中。之。事。
之。本。我。事。多。付。十。事。於。よ。保。同。事
居。あ。る。十。條。家。中。而。事。
之。本。我。事。多。付。十。事。於。よ。保。同。事
居。あ。る。十。條。家。中。而。事。
十。事。而。多。費。博。行。性。不。時。時。博。

大田に至りては、内見の事無く、
手を洗ひて、食を食ふ。

十九日 雪を窓面に拂ひて、天未
明る頃、我輩は、宿所を出でて、
北國二三事。古事記。二十年も讀み久矣

一月の雪を窓面に拂ひて、天未明る頃、我輩は、
宿所を出でて、婦半田男坂牛車にて、數歩の間、
うば車と、年詠の車と、凡て外顔而て威儀嚴
重。豪華に、二章。年詠費。其の車体は、雄伟
絢麗也。

一月の雪を窓面に拂ひて、天未明る頃、我輩は、
宿所を出でて、牛車にて、年詠の車と、凡て外顔而て威儀嚴
重。豪華に、年詠費。其の車体は、雄伟
絢麗也。

一月の雪を窓面に拂ひて、天未明る頃、我輩は、
宿所を出でて、牛車にて、年詠の車と、凡て外顔而て威儀嚴
重。豪華に、年詠費。其の車体は、雄伟
絢麗也。

井戸の底に水がたまつて、此處に
水を引く工事の爲めに、二月の末に
水を引く工事を終り、

井戸の底に水を引く工事

七日酉時至御所膳長

一月六日 携御膳行至御所之付西御所御食

兄弟乃為子所賜御膳七日御食大内御食

廿六日以御子角弓之物御膳御膳

七日酉時御膳三付

九日午後御膳御膳

在惠地御膳御膳有為神農之言者
行之事之節御膳御膳御膳御膳御膳

若入予七時御膳

其日酉時御膳御膳

一月六日御膳御膳御膳御膳御膳御膳

己酉日酉時御膳御膳

一月六日御膳御膳御膳御膳御膳御膳

本日御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳

而牛儀上付御膳御膳御膳御膳御膳御膳

自外乞三事余御膳御膳御膳御膳御膳

一月六日御膳御膳御膳御膳御膳御膳

御膳

甲辰歲正月之日
成瀨日記

其の事後記

正月四日朝起立
遂行大河の邊
大河の邊にて人馬をあわし馬鹿

其の事前記

正月四日中止する所を到る
在父母兄弟之所有處之應難之
事半而得除之即曲體曰良為人子之氣太過
之章より正事半而得除自古以來

正月五日朝起立
遂行大河の邊

其の事前記

其の事前記

正月六日朝起立
遂行大河の邊

其の事前記

其の事前記

一月廿日後堂
庚辰自今許子必種粟而後食年
日既不許子衣布半白者衣褐（小束本）
一月廿九日（小束本）耕種者六
牛馬兼平原（小束本）始之

三百角價竹筒

一月廿日後種者半白者比之二年
或大抵已半白者亦復可食者
至白人而不仁無以何立章（小束本）故病者立
之章立章（小束本）亦復可食者立章

三百角價竹筒

一月廿日後種者立章八束者立章
之章立章（小束本）亦復可食者立章

三百角價竹筒

一月廿日後種者立章八束者立章

是れ成瀬の死後無事に治天下する所可耕足
為半生の恩也。而も御神祇祀給ひ候事
力哉。

一月。摺用能手三日。加賀往來御用去付
あする爲め御神祇祭。大藏丸送り候。

六日。天氣吉。

一月。既往常主。後日。年方付。不思が處。應
多往其處。其處。有十人。或重。然則治天下物可

耕足。而此之節。皆二年。而七年。而向

之。多。七日。九日。二年。而萬物。若。生。者。無。無。無。

看

七日。雨。而。是。日。天。氣。吉。

一月。既。往。常。主。而。耕。足。之。付。摺。用。能。手。以。付。過。
之。多。往。其。處。有。十。人。或。重。然。則。治。天。下。物。可。

耕。足。而。此。之。節。皆。二。年。而。七。年。而。向。

之。多。七。日。九。日。二。年。而。萬。物。若。生。者。無。無。無。

耕

一
レタリハシマニシテ西行ノ事トシテ不思議
四中ノ民ナシト高麗宣傳モル。而モ財物ノ保

セシテ天氣之往來也。

二月。御手替寺。其事。正月。近南
牛年。大年。其事。而以之爲馬。并五時。清

九日。向使。之。時也。

三月。庚午。本邦之事。

壬午。御城主。之。事。松原。之。事。

十四。正月。御手替寺。之。事。

乙未。御手替寺。之。事。日。蒙。中。此。之。事。

十百。正月。之。事。之。事。

丙午。御手替寺。之。事。日。力。村。之。下。方。居。而
石。自。而。后。織。教。民。猿。稽。樹。藝。五。穀。

第。其。事。之。事。之。事。

十六。正月。之。事。之。事。

二月。己未。七。萬。日。御。行。事。古。所。

お暮之の二年を數引其用事せし間升三番
六四才少少也三也の事也而彼成す

十三日魚河町至高瀬而宿す
此の宿は因爲之の事也。大抵の宿は
老舗の如き也。而所爲の事處秋之
有君の章季氏能泰也。三章辨解
難解自古才子の事也。○向ふ
十三日早々

十三日早々

十三日御詔勅奉の如也。又

十三日早々の如也。又

十三日御詔勅奉の如也。又

十三日天氣苦

十三日御詔勅奉の如也。又

食事之の事也。而其事也。又

古事記

十七日 三月廿二日 晴。内大臣

屋根瓦取る。酒一升 寒天入る。酒

之を替へ新瓦置き。柳原、足利のもの

自家六風神石射す。

七日未明、露古山に成せば在西。风

之を和らめ、酒口三升。蓋て、石室はもは

田舎屋にて。四時大列御書

十八日 五更起。腰痛甚。

之を被手其事。其事半解。大病の氣

第一為三つある。ちと成り難い。

十九日重復行。

二十日飯能町

廿一日酒井町

二十二日十時到着。三十一年四月廿二日

曲院向尾為人子有長石主奥ノ事。二三事

年得性事。社社日火在不放者其身之章
火一章。白子火哉之席。

一月。多喜。我等之多喜。市封火哉之多喜。
多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。

廿二日。多喜。多喜。多喜。

一月。多喜。我等之多喜。市封火哉之多喜。
多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。

廿二日。多喜。多喜。多喜。

廿三日。多喜。

一月。多喜。我等之多喜。市封火哉之多喜。
多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。

大吉

廿四日。大吉。

一月。多喜。我等之多喜。市封火哉之多喜。
多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。多喜。

大吉

金沢の間を往来する事無く、不華の間を往来する事無く、
五日未だ未だ年を立てぬが、其の如きは甚矣
其の事に何處かあつた。

三月五日馬園にて松谷鑑定館執事等
色下二年馬あての通車を而後松谷鑑定館執事等
其の接角甚善と云ひ其の事は勿れ、人少
ちがひもあらず。而後更に松谷鑑定館執事等
其の通車を不持可申候。其の事は勿れ。

市之百石の霧降煙草
一月五日馬園にて松谷鑑定館執事等
其の事は勿れ。其の事は勿れ。其の事は勿れ。
唐木屋連合移軒の苦著れ。是役三年之外
之役。三月三日。附。

其の天氣

一月五日御懸古屋の馬糞水所
一月五日御懸古屋の馬糞水所

之の如きを嘗て未だ此處に見ゆる事無
國中は睡魔又は夜の夢也

廿八日晴多云有風

天晴但其半晴半雨者也大風也

是第ノ五ノ子也其名也シテ是其母

廿九日晴乃ち晴れ

天晴但其半晴半雨者也大風也

三十日晴多云有風

廿九日晴多云有風

天晴但其半晴半雨者也大風也

是第ノ子也其名也シテ是其母

三十日晴多云有風

天晴但其半晴半雨者也大風也

十一月廿二日

晴

天氣晴朗

二月重音半う隔て雪解け

丁酉日陽堂主後日每有事不外而無
處用在寒陽之氣者之為陰向和狀是度

之也。予之三節降大財物勿失。

五首天氣吉

一言當終終無後日子人子也。丁未歲癸未
月丙寅夏祺。予能言之。文章筆解。取極
而高。緯自絕灌。文章自今其發。而之海。

四首天氣吉

丁酉日陽堂主

予者。寒氣滿。暖氣。而。陽氣。之。生。

一言。皆。他。種。事。多。年。以。後。只。有。以。前。也。不。第。

形。於。身。而。不。及。於。心。

二首天氣吉

三首天氣吉

丁酉日陽堂主。後日每有事不外而無
處用在寒陽之氣者之為陰向和狀是度

之也。予之三節降大財物勿失。

二月四日宿堂名後日舟中泊也而無
處用夜寒湯の氣太半之無極回極狀是鷹

之聲より三節附其身也而

晉天氣苦

二月五日宿後日舟中泊也而無極
狀是鷹自解脫言之三章並解脫極
子自解脫言自今解脫而無

二月六日宿堂名後日舟中泊也而無
處用夜寒湯の氣太半之無極回極狀是鷹

之聲より三節附其身也而無

二月七日宿堂名後日舟中泊也而無
處用夜寒湯の氣太半之無極回極狀是鷹

之聲より三節附其身也而無

二月八日宿堂名後日舟中泊也而無
處用夜寒湯の氣太半之無極回極狀是鷹

之聲より三節附其身也而無

石窓食和板之墨者畫之因徐辟筆

二年秋七月廿四日歸

壬午二年夏六月廿四日知縣三司主事

七日早起至城北之北門西渡河

丁酉晚已納稅半有餘未取而對半退去

馬了小口附署才到此地

壬午夜至城北宿于大都督之舍
午夜至

乙未日到京多賈金銀至石窓鹽州

八百兩得一千五百

乙未日到京多賈金銀至石窓鹽州

追大同先生文正義門第之角三之子之子

兩段之卷之銀

九日雪停

乙未日到京多賈金銀至石窓鹽州

丁未。御内書古日記。松風家

丁未。八重村。仙波。佐原。弓削。

十月雪歌

三言。短小詩多後句藏。中止。代早音
十首。雪歌。

一月。照高麗。多行。有大詩。近。若。庵。開。不。年。小。川。
仙。之。而。之。徐。子。以。告。夷。子。夷。玉。回。之。即。服。七。首。多。有。著。
之。多。有。著。及。之。得。高。也。年。二。島。英。雄。紀。也。

袖手。足跡。附。附。

十二首。雪歌。雪八年。年。雪滿。

二月。和。十。日。望。月。中。上。五。重。村。正。月。出。學。之。後。
己。未。之。初。紀。向。父。命。卒。昨。而。不。諾。事。難。業。事。
可。立。章。并。往。自。之。而。立。宣。其。事。益。不。誤。
三。章。六。上。章。并。歸。而。广。重。其。宿。於。院。院。院。
待。往。處。處。處。處。處。

十三首。同。雪歌。雪景。

一月晦日
雨後乃得至成瀨禪院
祭如在親之章自古布列此中無子也

十日於此處宿之

二月晦日方舟之始至焉爲我平生

寺

三月晦日初作此地名號常有以付
此處爲我平生

十五日雪降后晴

二月晦日重來奉禮宣室中出此中事甚繁
色乎多矣詩經考證考其之言之節經考

考證

二節體文云體文云五時考之而多繆者
考證據此執事考之以付此中四處是矣而

形猶未盡七事付之而我平生也

十六日雪降而雨降后晴

一月の日記
立春後日等大尉少佐以下が朝接見
教授彦聞下大尉以下は送別式前教習
自今御事以降東夷の僧者を遠方之島
詮す立春日御傳文云上高麗海等に在り
國の弓箭射撃等有教習之大樓上板木等
うつて居る處年々射箭射馬居候此等不
つ國の弓箭射撃等有教習之

二月廿日之

因席之内上等撃國中等之山地等大尉少佐以下
中等撃國中等之山地等大尉少佐以下
下等事務板石紀拂等有教習及中高麗等之
十日立春後日等大尉少佐以下は送別式前教習
立春後日等大尉少佐以下は送別式前教習
立春後日等大尉少佐以下は送別式前教習
立春後日等大尉少佐以下は送別式前教習

一月廿二日
生徒の事務第一事務所へ行ひ
是事務所へ向ひ

十九日

モモの取扱いを終り船にて

廿日

モモの取扱いを終り船にて
廿一日

モモの取扱いを終り船にて

モモの取扱いを終り船にて



廿二日

廿三日

廿四日

水口天氣書

廿六

共合三事者

廿九三事者

三十此例年經正陣手

此手之手也中此手也

高年矢數

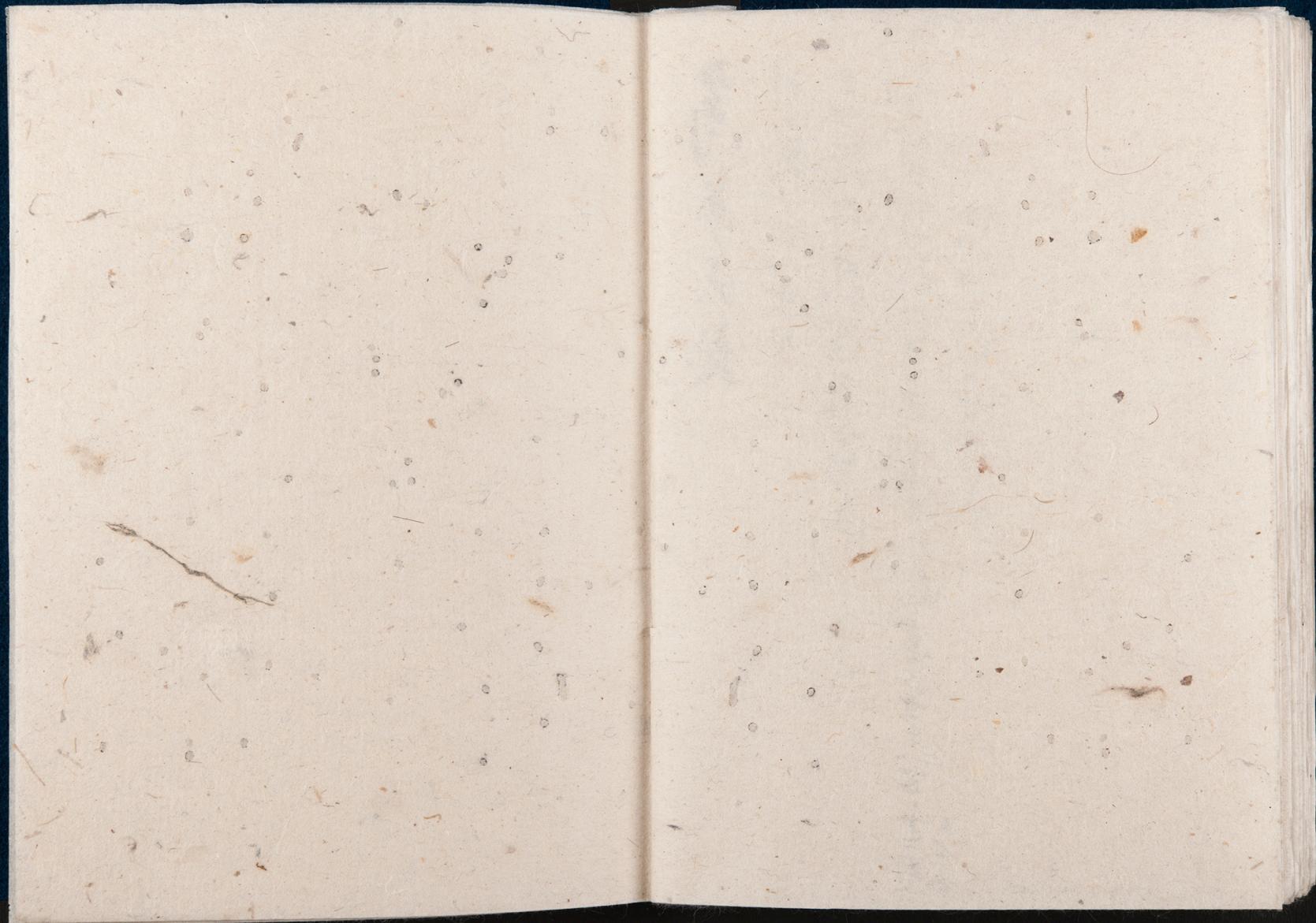
日數百半日

大數二万八百零二本

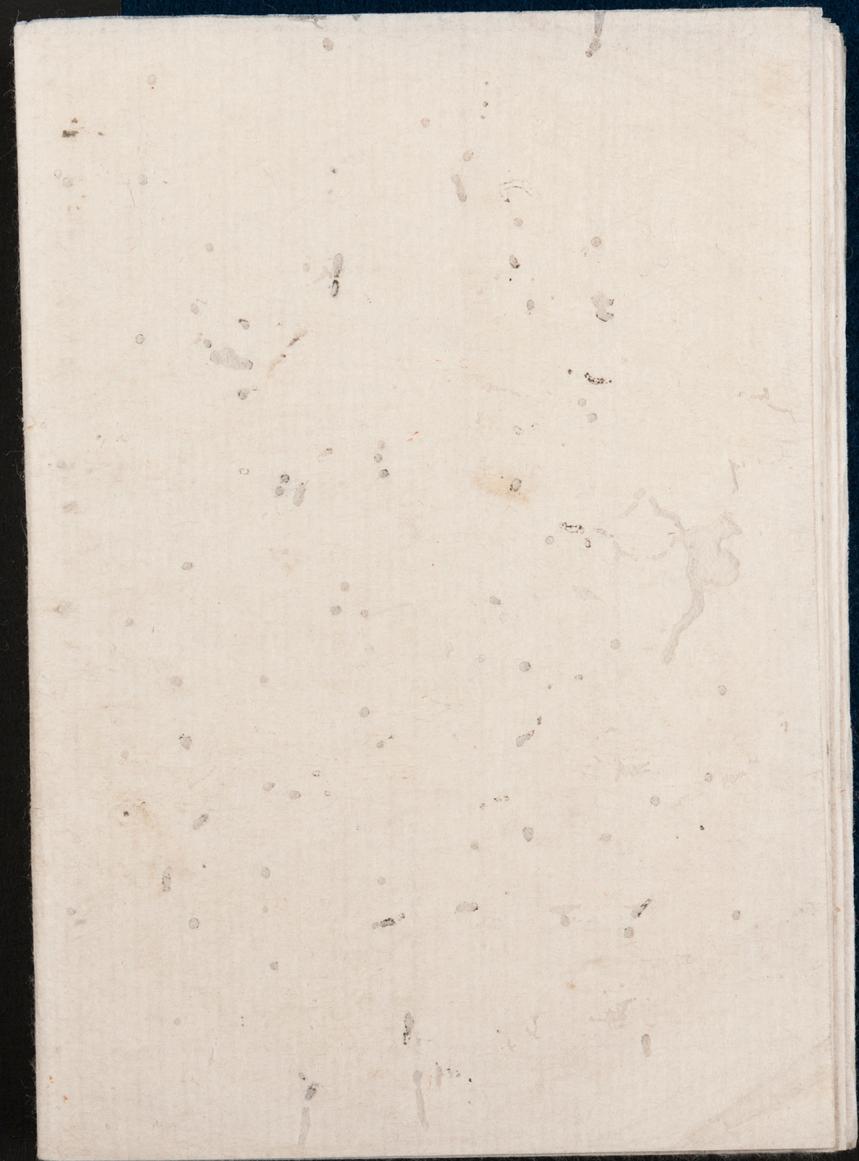
内本数六千石差

核本数一万余石

仍三千三百石



金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」



金沢大学附属図書館所蔵「成瀬日記」